魔法少女リリカル蒼天の要

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカル蒼天の要

【Nコード】

N3673L

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

気づいたらリリカルなのはの世界にいた。しかし特に焦ることもなく、以外にも自分は冷静だった。能力はチート。根性は捻曲がるそんな介入物語。

魔法少女リリカル蒼天の要 1話(前書き)

たぶん続きませんがよろしくお願ひします^^

魔法少女リリカル蒼天の要 1話

「あんた誰!？」

「通り過ぎの魔法使い。って言ったら信じてもらえるかな？」

「そんなファンタジーな事、誰が信じるって言うのよ!」

「全くで……」

「おうおう!! 兄ちゃん人様の仕事邪魔しないでもらおうか、それともアレか正義の味方気取りか! 全くこの頃のガキは怖いもん知らずだね……」

「正義の味方気取りは好きじゃないが……。まあ……。誘拐も一種の仕事か……。」

「ガキがなにごちゃごちゃ言ってやがる!! テメエらさっさとそこ
のガキ捕まえる!」

「ガキねえ……。あまり否定はしない。見た目まんまだからな。悲しいけど現実なのよね、これ」

「テメエもついでに誘拐して身代金要求さ……」

「ごめん、余りにすきだらけだったんでやっちゃった」

「テメエ！！ガキが良い気になってんじゃねえぞ！！」

「この程度なら木刀で十分かな？魔法はご法度だしね……」

「べつもありがとっ……」

「いや、あまり気にしないで……。じゃ俺は帰るわ、もう誘拐されるんじゃねえぞ」

「……名前は……」

「ん？」

「あんたの名前よ……」

「名前ねえ。八神流星、これが俺の名前だよ。教えたから帰るよ？」

「私の名前はアリサーバニングス。いつかこの借り倍にして返してあげるわよ!!」

「楽しみに待ってるよ」

「……ツウ!!」

「??？」

「今日は転校生の紹介をします」

「先生!!」

「はい、松本君何ですか？」

「女の子ですか!？」

「残念ながら、男の子よ」

「チクショー!!!」

「はいはい、じゃ入ってきてください」

「男で悪かったな。そこ」

「ブツ!!」

「アリサちゃん大丈夫!？」

「なんでアイツが此処に……」

「アリサさん大丈夫ですか？」

「先生、気にしないで続けてください」

「今日からみんなのお友達になる八神流星君です」

「どうも、転校生の八神流星です。よろしく願いします」

「はいはい!! 趣味は何ですか!?!」

「趣味はそうですね〜アニメ観賞ですね〜。俺ダメ人間だし」

「……………」

「ええ、八神君はお母さんのお仕事の都合で急に転校になりました。みんな仲良くしてあげてくださいね」

「じゃ、八神君の席はその空いてる席で」

「了解」

「で、なんでアンタがこの学校に転校してくんのよ!」

「さあ、なんでだろうね。ただの偶然だよ、きつと!」

「アリサちゃんこの人とお知り合いなの?」

「ええ、少し前に知り合いになったわ……」

「おっとそこまで! 取り合えず教科準備しないと」

「無駄にしっかりしてるわね……」

昼休み

「さてと、昼休みになったことだし……。図書館行って来るか」

「ねえ、流星君一緒にお弁当食べようよ!」

「高町……。それは無理な相談だ、だって俺弁当持ってきてないし」

「私の事はなのはで良いよ。え？お弁当忘れて来ちゃったの!？」

「ああ……。だからアリサとすずかと一緒に弁当食べてきなよ」

「なら、少し私の分を分けてあげるよ!？」

「別に俺、ナが付く惑星人と同じで水で生きてけるから、大丈夫だよ」

「う、嘘でしょ?」

「無論冗談だ、いやあくなのはは面白いからついついやっちゃうんだよ」

「ムウ……。流星君意地悪なの」

「ハッハッハ!」

「ちよつと、なのはいつまで私達待たせるつもりよ!！」

「理不尽なのアリサちゃん……。誘う様に言ったのアリサちゃんなの」

に…。なんで私が怒られなきゃいけないんだろ…」

「なのはちゃんしっかり！」

「流星貴方に拒否権はないわ、つべこべ言わず私達と一緒に弁当食べなさい！」

「命令口調ですか。…こんやろう…。しかしながら弁当なぞ持って来てない」

色々と言い合いになったが最終的に一緒に弁当を食べるはめになってしまった。弁当なんて持って来てないのだから、ただみんなの食べる様子を眺めてました。食べてる途中で、なのはやすすかが気まづくなってきたのか少し食べ物を恵んでくれました。

…女神様だ…

放課後

「じゃなー！」

「うん、じゃあね」

「さようなら流星君…」

「ふんー！じゃあねー！」

機嫌悪そうだったなアリサ……。しかし俺はそんな事に構っている暇はない。

すまないと心の中で呟きながら帰り道を歩き始めた。

「なあ……、ライトニング俺【此处】にいていいのか？」

『……………』

「そうだな……。居て良いか、居ては駄目かは分からないな……。あそこでアリサを助けるべきではなかったのか……」

『……………』

「この【世界】にあるジュエルシールドは理由を作るに必要な素材に過ぎない……。俺、厨二病臭いぞ、だか間違つてないあたりどうだろう？」

などと真面目に思考しているが、はたから見ると分には独り言してるただの危ない小学生にしか見えない。悲しい現実だな。トホホ……。

「【リリカル】に介入しても良いのだから大丈夫だろうか？」

考えがまとまらない。介入するにしたってどう干渉すれば良いか分からない、今はアリサの恩人（？）なのはやまずかの知人のポジシ

ヨンを確保してしまい、後は勝手に巻き込まれてしまうだろ。

「魔法なんて無ければ良かったのにな…。ここら辺で良いか…」

今現在彼八神流星は住めそうな廃ビルを探して右往左往していたりする。

「まあ…、うん、完璧だ」

流星が見る先には【通行禁止】とテープが張られている廃ビルがある

「ここなら色々大丈夫そうな気がする」

そして夜

「さて、そろそろなのはがフェレット君と会ってる頃だし、傍観しに行きますかね」

昨日、全域無差別念波が発信されてきた。俺も気が付いたがここでフラグ断つのはどうだろう、と思ったので放置です。

「【紫電】 起動開始、術式解放リリース!!」

『毎度絞まらないな主』

「ほっとけ!!」

『死ねば良いのに』

「……。壊してやろうかヘッポコデバイス……」

『本気にしないでくださいよ主』

「取り合えず、魔力反応的にこっちか」

「中々健気に頑張ってるねあの二人」

『なら途中で手伝ってあげれば良いじゃないですか主』

「手伝ったら駄目だろ、普通は色々な障害があつて人は成長するんだ。だから俺は傍観すると決めこんでるんだ」

『はあ…、そうですねか……』

「少し押され気味が、アレ？」

『心配するなら助けに行けば良いじゃないですか』

「それは……、ホントに危なくなったらな」

『なかなか主は優しいですね、赤の他人でしょうに……』

「どうやら封印し終わったみたい」

『彼女…、かなりの素質有りますね。将来が楽しみです……、同時に恐ろしい子になりそうです』

「さすが魔王様だな」

『魔王再来ですか…？』

「そゆう意味じゃないって…。何と言うか…、そう！イメージだ！ほらイメージピッタリだよ！」

『私はよく分かりませんが主がそう言うならそうなんですよ…』

「何かいつもの数倍は素直だな【紫電】…。毒舌のお前はどこ行っ
た」

『うっさい、黙りなさい、土に還って大地の肥料になってください』

「酷い（、（）」

『何か言い合ってる隙に高町さんいなくなってますよ』

「怪我はしてなかったようだし。大丈夫でしょ、俺達も帰るか…」

魔法少女リリカル蒼天の要 2話(前書き)

短いですがお願いします^^

魔法少女リリカル蒼天の要 2話

廃ビルにて

「やっぱ、一人廃ビルに住むのって寂しい」

「そう言えばジュエルシードは願いを叶える力があるとか無いとか聞いたことあるな、試しに一個持って帰るか。フッフ……」

計画は完璧だ、すずかの所の猫のジュエルシードを取ろうとするなのはに襲い掛かるフェイトから奪えば良いか……。フッフッフ……。腹黒いぞ俺

「もう寝るか……」

意識がもつろつとしてくる。夢で見たのは一人の少女そして一人の少年、周りには更地しかなくただ歩いているだけだ

『なあ、いつまでついて来るわけよ、もう用はないだろうに……』

『お前に無くても私にはプライドがあるんでな、借りはしっかり返

すつもりだ』

『はあく、物好きだねえ、お前…』

『お前程じゃないぞ……。近付いてきてるな【アイツ】ら…』

『だな、お前は隠れてる…、邪魔だ』

『お荷物になるつもりなんてさらさらないからな、私は自分の身ぐらい自分で守れるさ…』

『ああ…、そうかい。死んだら百合の花を備えた墓を作ってやる、安心しろ』

『安心出来るか!…!』

『殴るなよ、かなりそれ痛いんだから』

『ほざいてる!何で墓に百合飾るんだよ!私はアレか同性愛者なのか、お前の頭の中ではそうなってるのか!』

『冗談だ、取り合えず先に【アイツ】ら退けてからにしようぜ』

『ああ、分かっている行くぞ!』

魔法少女リリカル蒼天の要 3話(前書き)

途中からになってしまった^^;

魔法少女リリカル蒼天の要 3話

という夢を見ましたとさ

「此処に来てから、さらに厨二病に磨きがかかった気がする。大丈夫か俺」

「様自分の心配はしといた

「さて聖小にも行ってきますかね…」

軽く身仕度を整え廃ビルを出ていく、学校までの移動方法は結構バスで通学する人が多いのだが俺はバスなぞ使わず徒歩だ。

「どうもおはようございます」

「って、学校遅刻ギリギリじゃないの！なに呑気にしてんのよ！」

朝からハッスルしている人物は、アリサ

「まあ、まあ…、落ち着いてアリサちゃん…」

そのアリサを宥めようとする人物は、しずか

「おはよう！流星君！」

朝の挨拶の元気が良いのが、なのは

「いや、学校からの距離が遠くてな、朝からモーニングウォークしてるもんだから間に合わないんだな…、これが」

「何…、あんたどこの爺さんよ！」

「まあ、そう言っつな。健康に良いと思っつぞモーニングウォーク」

「流星君いつもそんな事して学校来てるの？」

「どちらかと言いますか…、経費削減の為です。…ハイ…」

「あんたの家、ここから近かったかしら？」

「近いと思っつぞ。たぶん」

「なんで自分の自宅なくせして答えがそんなにあやふやなのかしらね？」

嫌な予感がプンプンしてくる

「学校が終わったら流星の家に行ってみましょ！」

アリサがそう言うはずかはこちらを見つめて

「流星君の家に行っても大丈夫…？」

「だ…」

「大丈夫だってさ、ならお言葉に甘えて行きましょ」

おい、人の言葉遮って違う言葉に訂正するな

「私も流星君の自宅見てみたいの！」

何かなのは張り切ってるし、ここで駄目と言ったらアリサに空気が読めと言われそうだし…、仕方ない

「分かったが、かなりつまらないし夜になるとかなり危険な場所だぞ。さらにアリサは一度来たこと有るしな…」

「え？」

アリサがポカンとしている、なのはやすずかも少し驚いておりアリサと同じポカンな顔してる

「アリサちゃん行った事あったんだね…、初めて今日知ったよ…」

「…私アンタの家一度も行ったこと無いわよ…？」

「まあ、あれは不幸な事故だったし仕方ない。覚えてないかもな…」

「…」

「…あ、そ。でもね行くと決めたら行くのよ私は」

「そっかい…。分かった好きにすると良い…」

魔法少女リリカル蒼天の要 4話

今日は珍しくアリサが歩きで移動してる、あまり見られる光景じゃないよな。アリサ同様俺の後ろに引っ付いているのはさすがとなのは、以上3人

「ねえ…、アンタの家何時になったら着くのよ…!」

長時間の徒歩のせいかいい加減アリサが怒りだしてきた

「後、2時間ぐらいだから安心しろ」

絶句する3人

「アリサちゃん帰ろうよ」

そう切り出してきたのはなのはだった

「そうね、帰りましょう。アンタの家遠すぎよ!…!」

「ごめんね、流星君。無理言っつて案内してもらってるのに途中で帰るなんてして」

「別に俺は構わないよ、それよりもそこにいる金髪の奴が悪い」

ビシッと俺はアリサに向けて指をさした

「ううゝ、何とも言えません…」

「じゃ、気をつけて帰れよ」

「うん！じゃあね流星君」

「じゃあね流星君…」

「ふん！」

アリサだけにはそっぽを向かれた

「さて、3人も帰ったな」

右腕に付けてあるブレスレットと否違うデバイスに起動パスワードを入力し、空に俺は飛び出した

「さて…、今日も頑張つてジュエルシード集めますかね」

あの夜から考えたがやっぱりジュエルシードを集める事にした

「やっぱりみんなが笑い合えるハッピーエンドが欲しいからな…、その為なら力を惜しまないつもりだ…」

PT事件なんて起こさせない、フェイトとアリシアとブリシアさん。この3人を助けだしてみせる……。絶対にだ！

『あれ？何か腹黒から熱血入ってますね〜』

「ん？元からそのつもりだったのだが…。どっかで道間違えたか？」

『フェイトさんに闇討ちする気満々だったじゃないですか』

ああ〜、完璧忘れてたよ、一時期やろうと考えてたな。闇討ち

「あんな事考えてた自分が恥ずかしいな、やるなら真っ正面からだ

な
」

そして漆黒の夜に向けて今日も一日頑張ろう…

魔法少女リリカル蒼天の要 5話(前書き)

地味に続けてみます^^;

魔法少女リリカル蒼天の要 5話

さすがになかなか見つからない、サーチやら飛ばして捜しているが見つからない、人に聞いたり馬鹿な事をしてみたもの見つからない

「俺にどうしろと…?」

『主は馬鹿ですからね』

「ほつとけ!」

原作では、なのはもフェイトもジュエルシード探すのに苦労してたからな。ん?誰か忘れてるような……。まあいいや

「君は何者?」

後ろからは魔力刃を突き付けてくる原作キャラであるフェイトの声が聞こえてくる

「何者かと問われたからには言い返すのが基本だな。相手に名乗らせたいなら先に名乗りなさい」

とりあえず、これで最低テストロッサ家の中ではフェイトの名前は知ってることになる。これなら以後名前で呼ぶのにも不思議に思わないはずだ

「私の名前はフェイト。テストロッサ……。貴方は何者？」

何の躊躇いもなく答えるとは…、なんか良い子だな…。名前から事件の首謀者分かったやうのに

「俺の名前は八神流星」

「それは君のデバイスだよね？」

フェイトは俺が右手に持っている刀型のデバイスを指してそう言った

『バレバレですよ馬鹿主』

「まあ、うん…。そうなるな」

デバイス所持者と確認をとるとフェイトの顔が険しくなっていく

「時空管理局の者なんですか？」

あ、やっぱりフェイトは何か勘違いしているようだ。ここは一発警戒心が緩む感じのことでも言っとくか

(…紫電…)

久しぶりに俺のデバイスと念波を試してみる

(お？念波なんて久しぶりに使いますね)

(解説メンドイからお前は喋るな、以上)

(酷い！)()

我がデバイスよ…、かなり余裕だな……

「俺は時空管理局に敵対する組織……。TVTという所の幹部をやつてる。テストロッサということは、君はプレシア=テストロッサの身内か何かな？」

フェイトはしまった！的な顔をして俺の顔を睨みつけている

（分かって聞いてますよねそれ？）

その中でデバイスが念波を通じて俺に色々と茶々してくる。という
かツッコミだなwww

（と言いますが、TVTで、そんな組織ありませんよね、死んでく
ださい主）

（黙ってブーン！！）

（うわ！ちょ！）

無理矢理に沈黙プログラムを送ってやった

とりあえず…原作キャラとの接触……。そして本格的に行う原作介
入……。これからもっと頑張っていこう

魔法少女リリカル蒼天の要 5話（後書き）

顔文字？っておかしいですかね？

魔法少女リリカル蒼天の要 6話（前書き）

前のと合わせて読みます

魔法少女リリカル蒼天の要 6話

「そんな事聞いて、どうするんですか…?」

「いや、ただ単にテストロッサの身内の方なら、プレシアに取り次ぎ願いたいだけなんだよ」

「すみませんが…、貴方の様な方に、母さんを会わせるのは…」

仕方ない……。極力使いたくないけど原作ネタを一枚切るか…。

「ならせめてプレシアさんに伝言を伝えて欲しい」

「何ですか…?」

「アリシアの為に協力しよう…。こう伝えてくれれば幸いだ」

「?分かりました母さんに伝えておきます…」

フェイトは背を俺に向け夜空に飛び出した

「さて…。どう動くか楽しみだ」

そして今日はその後廃ビルに戻りそのまま寝込んだ

今夢を見ている……。場所は酒場らしき店の中、席に座り酒ではなく水を煽っていた

『やっぱり水が一番だよな…』

などと呟いたら、周りにいる恐いお兄さん達に睨まれた。だって俺正直者だし（嘘）、何より俺はその場の気分で動いているので自重しない

『お前な少しぐらい空気読め、視線が痛くて堪らん』

銀髪の少女は隣の席に座っており、うんざりだ、という顔で文句を言ってきた。

『まあまあ、空気なんて別に、読む必要無い訳ではないが、融通効くだろ』

『お前の場合読まな過ぎなんだよ!!』

『まあ、いいじゃん、別に死ぬわけじゃないんだし』

『私は別にお前を心配してるわけじゃないぞ!!そもそもお前は…』

…』

銀髪の少女の言葉を、遮るかの様にして、けたたましいサイレン音が町中に響き渡る。

『敵襲か……?』

などと呟いた瞬間、周りの男達の様子が一変した。

『アイツらが、とうとうここに来やがった!!』

『俺達もうおしまいだ!!』

色々と周りが絶望色に染まっていく

『一丁やるか』

『珍しいな、お前が自ら戦うなんて、言い出すのは』

『良いんだよ、少しは…、運動しないと運動不足になっちまうからな』

『毎回毎回、私はお前の行動基準が、分からない』

『俺は気分屋だからな、なんとなくで動いてるぞ』

『さすがというか、馬鹿だな』

『では、戦場へ行ってくる』

『仕方ない、私も行くか……』

席を立ち外へ、出ようとするのと酒場のマスターが、呼び止めてきた

『お前達はどこに行く気だ!?!』

『退治に』

『馬鹿の世話だ』

そして酒場から俺達は出ていった

『あいつら、いったい何者なんだ……?』

魔法少女リリカル蒼天の要 6話（後書き）

過去話ってわからないと面白くないですよね^^：
：

魔法少女リリカル蒼天の要 7話(前書き)

地味に更新続けていきます。

魔法少女リリカル蒼天の要 7話

また夢を見た……。

公園で、ブラブラと散歩していると、高町なのはを目撃してしまった。幸いなのはこちらに、気付いてないようなので……。

「見なかった事にしよう」

些か一人で、何してるか疑問に思ったが、今日は土曜日。緩やかに過ごしたい俺にとっては、あまり知り合いとは関わりたくない。

「ああ！！流星君だ！！」

ああ……。気づかれちゃったよ。

「よう、なのは」

「流星君、偶然だね。ここで何してるの？」

「散歩ですが何か？」

「てっきり流星君は、休日は家に引きこもってるよ、思ってたの」

「失礼な！俺はアウトドア派だ！」

「あ、そうそう、近くに美味しいケーキ屋さんが、有るから行くよ」

いきなり、話しを変えないでください

「ケーキ屋ね……。奢ってくれるなら良いよ」

「うん！！」

そうでした、忘れてましたよ、ここ、なのはの家族が、営業してる所だ。

「ただいま！」

「お帰りなさい、なのは。ん？その子は？」

「同級生の流星君だよ」

「どうもお邪魔します。そしてさようなら…」

「流星君、いくらなんでも、帰るのが早すぎだよ！」

瞬間俺の身体に、何か分からないけど、有り得ない程に魔力が活性化していく。ハッキリいって、無理矢理魔力を押し込められた感じだ。なのはが触れれば、たぶんなのはのリンカーコアは、破裂してしまうほどに影響を受ける。直感的に俺はそう思った。

「俺に近付くな!!」

状況は、結構笑えない状況にまでに、なってしまっている。

……触れれば破裂……。

……なのはのコアが破裂。……。

魔法に依存しているなのはは、魔法が使えなくなったら、きっと悲しむ。この世界に絶望してしまう……。絶対にそれだけは避けなければ！

「にははは。流星君痛い痛いよ」

かなり酷い事言ってるけど、そんなことより離れてください、笑っている場合じゃ、ありませんよなのはさん。

「流星君大丈夫!？」

確かこの方、桃子さんだっけ?結構本気で、心配してくれるあたり、なんか感動しちゃいます。

「いえ、大丈夫です」

「あれ?ホントに痛かったの?」

え、なに?その驚いたみたいな目は。何かとても絞め殺したくなる衝動に駆られただけ。

「少しな……。まあ大丈夫だ」

「ううはこーいで行く」

「じめんなさい」

「そんな気にするなよ」

「うん、じめんなさい」

「だから……。まあいいや、とりあえずケーキは？」

「うん、そうだったね。ちょっと用意してくるから待っててね」

それから待つこと数十分

「おまたせ！」

エプロン姿のなのが笑いながらケーキをテーブルの上に置いた。

「中々うまそうだな、さすが美味いと名高い喫茶店」

「でしょ！？お母さんのケーキはおいしんだよ」

ケーキを一口食べようとした瞬間、どことなくジュエルシードの発動を感じた

「流星君ゴメンちょっと用事が出来ちゃった」

なのは着のみきのままどこかに出掛けてしまった。

「桃子さんちょっとなのは後ついて行きます」

危険なことになるかも知れないので、念の為になのは後をつけることにした。

「いつてらっじゃい」

桃子さんその笑顔怪しいです。

魔法少女リリカル蒼天の要 7話（後書き）

あと残りありません・・・

魔法少女リリカル蒼天の要 8話

さて、どうしたもんか……。

現在喫茶店を抜け出し、なのはを追いかけている。

「それにしたって、今何処に向かっているのか、見当もつかん」

そもそも、俺は此処の地理をまだ覚えていない訳だから、迷ったら大惨事だ！

「ここは……？」

目的地は神社、神社。みたいなのに着いた。

見ると、戦闘が始まっているようで、犬が突撃しなのはがそれに対しプロテクションを張った。しかし力の差のせい、押し負けているようだ。

「犬と戯れる少女。なんか幻想的だな、オイ！」

犬は更に勢いを付けて、なのはに向けて突撃した。

なのははそれを避けると、空に飛び、スフィアを出して砲撃をしはじめた。

「あれ？こんなになのはって、戦い馴れてたっけ？」

避けてからの切り替えし、さらに冷静な判断での空からの砲撃。ど

れをとつても素人とは思えない技量を、なのはは持っていた。

「それに姪獣は？」

原作でいたのだから居るだろうと思ひ、周りを調べてみると。

「なのは右から来るよ気をつけて！」

指示を出しているだけで、援護をしない姪獣がそこにいた。

「ああいう輩を見ると、無性に投げ飛ばしたくなるのは、俺だけか？」

ああいう輩は何考えてるか、分かったもんじゃないからな。

「さて……。なのはが何故ここまで戦い慣れしてるか、疑問に思うが……。難易度上げさせて貰うぜ！」

なのはの戦いに余裕がみられたので、面白半分で姿隠して前に現れることにした。

バリアジャケットのセンスは『紫電』に任せるとしよう。

『任せてください。ユーモアある格好を期待してください』

任せなきゃ良かった……。

ふつつつと後悔の念が……。

まあ、とりあえず。

「『紫電』セツトアップ！」

『了解！』

と、セツトアップした訳なのだが……。

「真つ黒かよ……」

俺は完璧『黒騎士』的な格好をしている。なにこのフルプレートとか、紛が紛がしいのだが……。

『どうですか私のセンス！』

ボケているのか、突っ込むを入れて良いのか分からないのだが……。

「俺に死ねと」

戦いの最中にこんな格好で人様の前に出てみる。あまりの紛が紛がしさに、反射的に撃たれちまうよ。

『格好良いでしょ？』

オイ！質問を質問で返すとは良い度胸してるじゃねえか、このヘッポコデバイス。

「行くよレイジングハート！」

『YES、master』

「《デイバイン・バスター》！！」

なのはの撃ったデイバイン・バスターは直撃し、ジュエルシードを封印した。

「ほんじゃ、介入するか……」

そして、封印したばかりのなのはの前に俺は現れた。

「なんだ、この紛が紛がしい魔力は……！」

とユーノ。

「貴方はいったい誰……？」

おっかなびっくりしながらも聞いてくる、なのは。

（おい、ヘツポコデバイス）

（それは、私に対して言ってるんですか主）

（お前以外に誰がいる）

（その左腰に差してある、働かない『雷電』姉さんとか）

（……呼びましたか『紫電』……）

（ややこしい時になんで起きるよ『雷電』）

(それよりなのはさん達はどうしますか?)

(適当にやるわ……)

「おい、魔導師とそこに居る姪獣」

もちろんボイスチェンジを使用。なのはにも気付かれない様にした。

「一丁やろうぜ!」

そう言つと俺は『紫電』を抜き、構えた。

「えっ……!」

なのはは驚きのあまり無防備だ。

直ぐさま俺はなのはの懐に入り込む為。

「《神速》!」

超高速の技の『神速』を使用し、一瞬にてなのはの懐に入り込んだ。

「なのは危ない!」

ユ一ノはなのはにそう叫ぶが……。

「遅い!」

紫電の一撃がなのはを襲つ。

『Protect』

だが、その一撃はレイジングハートにより阻止された。

「ありがとうレイジングハート！」

喜んでいるのは構わないが……。

「次が来ないとは思わない方が良いでしょう」

更に一閃。

『Protect。マスター、空に一端待避してください』

レイジングハートに言われ空に上がろうとするが。

「素直に上がらせると思うか」

飛び立とうとしたなのはの頭に、アイアンクローを掛けた。

「ガッ!!」

苦しむのは。

「なのは!!!!」

仲間の窮地に戸惑う姪獣。

「なあ、魔導師、分かったか。これが力の差だ。弱い魔導師は、力のある魔導師に潰される。常識だな……。そんな事を知りつつも、軽く魔導師をやってみたいと言わないことだ。やるなら、殺される覚悟も殺す覚悟も持っておいた方が良いでしょう」

メキメキ。

なのはの頭に、更に力を加え苦痛を与える。

「ガツ……、イ、タ、イ……」

苦痛になのはの表情が歪む。

「なのはを離せ……！」

そう言うと姪獣は、俺にイタチの状態のまま飛び掛かった。

「邪魔だ……この原因者が……」

飛び掛かって来たユーノに回し蹴りを一発放った。

「グハツ……！」

ユーノに見事までの回し蹴りが決まり、バウンドしながら意識を失った。

「魔法も無しに飛び掛かるとは無謀であるが、その根性は好みだぜ」
勇気あるユーノの行動に称賛を讃えた。

「さて、魔導師。お前には今選択肢がある。このまま魔導師を続けて俺に殺されるか……、魔導師を辞めて生きるか。お前はどちらを選ぶ」

とりあえず、苦しそうだったのでアイアンクローを解いた。

「ゲホゲホ……！」

「ほら解いてやったんだから答える」

どこまでも冷たい目線で、どこまでも深い視線でなのはを見た。

「わ、私は……、殺すとか苦しめあうこととかはやっちゃんいけないと思うの……」

「なら魔導師を辞めて平凡に戻ることだな」

「でも！ユーノ君は私の友達だから！ジュエルシードはユーノ君の落とし物だから！だから……、私は……。ユーノ君のお手伝いをやめない！魔導師をやめない！これが私の意思！」

なのはの瞳には、強い決意が秘められていた。

「なら、せいぜい後悔することだな。若き魔導師」

そう言っただけ俺は空に飛びだった。

元より殺しなんて端から考えちゃいねえよ、ただなのはの甘い考え方に厳しさを教えたかったからな……。

しかし、やり過ぎた……。

力込めすぎたな……。

(主……ほんと考え無しですね。馬鹿ですね)

紫電からちよくちよくと毒舌がくる。

(ま、ほっとくのはさすがにヤバイから、バリアジャケットを解除してからなのは家を家に送ってやるか)

近くの茂みに隠れ、バリアジャケットを解除した。

「さて、いかにも通り過ぎの様にしないとな」

そう言ってなのはの方に向かった。

「やっぱり倒れてたか……」

やはりアイアンクロウを強くしすぎたせいか、言いきった後なのが倒れてたようだ。

「とりあえず外傷はないし、中味も大丈夫だろ……」

ユーノを見つけ、なのはをお姫様様抱っこした。ユーノは、なのはの上に置いて運んだ。

なのはの家を見つけるのは簡単なのだが……。さっきから人様の視線が痛いなの。

しかし、最後まで負けじと自宅まで運んだ。

ピンポン！

なのはの自宅のチャイムを鳴らした。

「どちら様……」

出て来たのはあの有名な鬼いちゃんだった。

「な……」

なのはが気絶してたんで運んで来たぜ。と言う間もなく、鬼いちゃんは木刀で殴り掛かって来た。

「おい！なのは居るのに何故切り掛かって来る！」

余裕で避けたが、まさかなのはが俺の腕の中に居るのに切り掛かって来るとは予想外だった。

「うるさい！！なのはをたぶらかした奴の言葉なんぞ聞かん！！」

更に切り掛かってくるが……。

「ガハッ……！！」

鬼いちゃんこと恭介は、頭にだれかの木刀が上手く決まり気絶した。

「ごめんね、家の身内が迷惑をかけた。そういうことだから、家にながらないかい……。なのはのことも、さっきの君の動きも気になるし……」

士朗さんは殺気をぶつけてきた。

「いえいえ、俺も忙しい身の上、歓迎は遠慮しておきます」

あまりなのは好感度を上げたくないしな……。

「そう言わず。ちょっとお話しするだけだから。それとも君は、こ
つちのお話しの方が好きかい」

そう言っつて木刀を突き出した。

「はぁ……。めんどいから一回勝負で。それとなのはには俺が運ん
で来たことは言わないでください」

「……子供に舐められるとはね……。良いだろう。こっちに來な
さい」

そして俺は、士朗さんの後についていった。

「なのははどうします?」

さすがにこのままはヤバイだろ。

「……あ、そうだね。桃子!」

そう言っつて桃子さん呼び出した。

「士朗さんなに?あらいらっしやい。ってなのは!」

俺の腕に抱えられているのはを見つけ驚いた様だ。

「今日、この子が気絶したなのはを見つけて、運んで来てくれたみ
たいだ」

「っ」とで桃子さん、なのはをお願いします

「そう言っつて桃子さんになのはを預ける。

「ほんと、ありがとうね。御礼に……」

俺は桃子さんの言葉を遮り。

「御礼目的ではありませんし、ただの偶然ですよ」

本音はただめんどいからなんだけどな。

「君行くよ」

士朗さんに少し急かされる。

「了解」

そう言っつと、俺は士朗さんの後をついて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3673/>

魔法少女リリカル蒼天の要

2010年10月14日14時37分発行